

◎電業特報ロングインタビュー

【明日に向かって立つ】 SEASON-2 Vol.16

好きこそものの上手なれを体現する女性建築士 五感で享受する理想の家を目指し本日も奮闘中

《今月のゲスト》

建築設計事務所「アトリエM」代表
牧野 芳子 Yoshiko Makino

取材・本誌編集部（井口、遠藤）／ 2018.12.27



◇はじめに（女性人材を巡る業界潮流の問題点）

今月のゲスト《アトリエM》代表の牧野芳子さんは、フリーランスの建築設計士だ。アトリエ M の公式サイトの自己紹介欄にはこうある。

「アトリエ M は代表・牧野（女性）が運営する設計事務所です。牧野はもともと会社勤めで秘書業務に従

事していました。建築が好きで転身し、現在に至るわけですが、このお仕事をできることを嬉しく思います」

本欄ではかねてより、第一線で活躍する女性の建築設計士、施工管理技士（建築・電気工事）、電気工事士などに単独インタビューをさせていただきたいと考えてきた。

それもたとえば、建築設計士の場合なら、建築設計

が好きで好きで、他の仕事に就いていたのだけれど「建築設計士への思い止まず、ついにその道に入ってしまった」というような人に。

公式サイト上の牧野さんの自己紹介は、まさにそれを地でいくものといえる。

ところで小紙はなぜ、そのような方々に取材をしたいと考えてきたのか？ その一つの背景として、電気設備・電気工事業界を含めた、昨今の建設業界における、人手不足解消に向けた方策の《潮流》がある。

電気設備業界を含む建設業界では近年、人手不足解消に向けた有力な方策として、シニア（定年後）世代の活用、女性人材の積極的な採用、外国人材の導入を《人手不足解消のための3大プロジェクト》と捉える風潮が強かった。

実際これらの実現に向けた動きは、すでにさまざまなカタチで推進されつつあるわけだが、なかでも最も合理的かつ未開拓な分野と目されるのが、小紙でも再三特集してきたように女性人材の積極的な採用だ。

女性人材の採用に積極的な業界企業に話を聞くと、女性人材はコミュニケーション能力などに優れている例が多い。現場仕事を中心とする電気設備業界・建設業界という観点からみても、総じて優秀な人が多い、という声をよく聞く。

そして実際、工事部（主に施工管理部門だが）にも積極的に女性人材を採用している企業のなかには、女性人材の占める比率が高まるとともに、完工高も急成長している事例さえある。

そのように女性人材の採用に積極的な企業もある半面、業界内には、単に人手が足りないから女性を積極的に採用しようというような風潮が、残念ながらまだ根強く残っているように感じる（それ以前の問題とし



て、女性人材を現場仕事に導入すること自体に消極的な企業も相変わらず多いが）。同様の「感じ」はシニア世代の採用や外国人材の導入に関する論議にも常につきまとう。

女性人材・シニア世代・外国人材の採用が進んで人手不足が解消していくのはもちろん結構なことなのだが、採用する側の意識がそうした「員数合わせ」的なものでとどまっているのであれば、本当の意味での女性人材・シニア世代・外国人材の「人材化」は図れないのではないだろうか。

国が提唱する「働き方改革」（全面的にそれがいいかどうかはともかく）の精神にも、それは合わない。女性が男性と同様に輝く業界にならなければ、明るい未来はないのも自明だ。女性が男性と伍して働いているのが当たり前の業界にならなければ、業界は人材雇用面でこれまで以上に《ガラパゴス化》の道をたどるだろう。

女性には向かない、男性だけに向けた仕事も、他業界に比べて建設や電設の工事現場には確かにある。しかし、それは筋肉系のパワーを必要とするような一部の業務だけであり、施工の技術や施工管理の技術には本来、性差はないはずだ。

差が生じるとすれば、それは個人差であり、性差で

家のどんづまりの書斎。これぞ男の隠れ家 (同)



はない。したがって、単に男性だから優位性があるとか、単に女性だから不向きだとかいう「ハナからの決め付け」は極力ないような、そんな業界であってほしい。

員数合わせなどではない、男女が当たり前と一緒に働ける環境がいろいろな意味で構築されれば、今に至るも続く業界の3Kイメージは自然に緩和され、いつかは払拭に向かうのではないだろうか。

そのためには建築士になりたい、電気工事士になりたい、施工管理をやりたいと積極的に願い、実際に遣り甲斐を感じ、嬉々として働く女性がたくさん増えていく必要がある。そうした女性を当たり前を受け止める業界になっていく必要がある。

その先駆けとして現在、建設業界・電設業界で嬉々として働く女性、あえてそうした業界に飛び込んで自己実現を図り、奮闘している女性のお話を積極的にうかがっていくことには、だから大きな意味があると考

える。

小紙ではそのような観点から、繰り返しになるけれども、幅広い意味での建設業界で「生き生きと楽しく活躍する女性」にご登場をお願いしたいと考えてきたのだ。

今回はその、記念すべき第1弾である。

1. 私はなぜ建築士になりたかったのか？ (建築士への道程)

私は当初、割りと小規模なデベロッパーに就職し、秘書業務に就いていました。他のデベロッパーと同様、バブルの頃までは国土開発の流れにも乗って、かなりエネルギッシュな会社だったようですが、私が就職した頃は、むしろアットホームな感じのする、ごんまりと穏やかな雰囲気の家社になっていました。私自身もとくに何をしたいということもなく就職しましたので、逆にそういう雰囲気に、とても居心地の良さを感じました。

上司にも恵まれ、人間関係も良かったですね。でも、勤めながらなんとなく、何かを勉強してみたいなあと、漠然と思うようになりました。それでとりあえず、当時はゲームのファイナルファンタジーやアニメの3DCGなどが出てきて、興味をひかれていたので、それを学べるような学校に行こうかと。

それで見学に行きまして、体験でCGを作らせてもらいました。私はそのとき、自分の部屋をCGで再現することにしたんです。それで楽しくやっていたら、先生が「CADで作った画像みたいだね」とおっしゃったんです。

私が「CADって何ですか」と聞くと、「建築の技術の一つで、コンピュータを使って設計をしたり、設計のアシストをしたりする手法だよ」と。「え？ それは面白そう」と思って(笑)、今度は建築の専門学校へ体験に行きました。そうしたらこれが楽しくて、それでその専門学校に入ったのが、現在の建築設計のお仕事につながる道のりの、最初の1歩ということになります。

「パソコンに強い女性、興味をもって使いこなす女性の比率は、実は男性より多い」「図形に強いのは男性よりむしろ女性ではないか」……そんな話もよく聞く。その真偽はともかく、入社試験の際にパソコンスキルをテストすると、女子学生のほうが総じて成績がいいという事実は確かにあるようだ。

また業界各社では、電子入札を女子社員に任せているという例が少なくない。現場志望の女子社員には最初はCADを担当してもらおうという事例もよく聞く。とくに事務系など、他分野の仕事をしてきた、パソコンに興味のある女子社員が、電気設備会社に転職してCADを初めて体験したら、きっと工事部門の仕事に興味をもつに違いない。

牧野さんの建築設計への興味もかくしてCADの「楽しい体験」から、はじめたのだった。

専門学校に通うようになってすぐ、建築設計士の資格（2級）を取ろうと決心しました。上司にも「実はこういう学校に通っています」と個人的に話しましたが、それは会社に報告するという趣旨のものではありませんでした。2級建築士を取ったら、勤めていた会社のなかで配置換えをしてもらうおうとか、そういうことのために通っていたわけでもなかったからです。

そのとき勤めていた会社はマーケットをベトナムなどのアジアに広げようとしていて、素朴に国内で手作りの家を設計したかった私とは方向性が違いました。

そうこうするうちに夜間の専門学校（2年制）を修了し、2級の受験資格を得ましたので、2級建築士を取りました。その段階でデベロッパーを辞め、設計事務所に転職しました。

さらに2級建築士として、設計事務所ですら規定の実務年数を勤務しますと、1級建築士の受験資格を得られます。そこで

今度は働きながら、1級建築士の受験専門予備校に通うようになりました。

それで転職から数年後に1級建築士の試験を初めて受けましたが、このときは学科は受かったものの、実技試験で落ちました。

ご存知だと思いますが、1級建築士の試験は学科試験に通れば、無条件で3回までは受けられます。それでその後も1級を受け続けたのですが、スベリっぱなしで（笑）。

ちょうどそんな頃です。仕事を通じて知り合った、都内で設計事務所を営んでいる社長さんに、こんなことをいわれました。

「牧野さん、1級建築士の資格は持っていないよりは持っていたほうが、確かに箔は付くし、見栄えもいいかもしれないけど、1級を持っていても仕事のできない建築士はたくさんいますよ。逆に2級しかなくて



も、仕事をバリバリやって、顧客から信頼されている建築士もたくさんいます。たとえばあなたが独立して、設計の仕事をしていこうと思うなら、自分は2級のままでバリバリ、1級の人をしのぐような仕事をして、いつか1級建築士を社員として雇えるような会社にしていけばいいんじゃないですか」と。

なんだか、目からウロコのような気分でした（笑）。その方もまた2級建築士しかもっていないのですが、都内でバリバリ仕事をされているんですね。実際、社員のなかには1級建築士もいる。だから「ああ、そうだよな」と（笑）。

その一言にも背を押していただいて、私は足掛け7年前に独立したわけです。実際に設計の仕事が自分が直に受けるようになって、新築もリニューアルも含めてそれなりに仕事をさせていただいてきましたが、住宅建設の仕事が中心のせいもあってか、1級の資格が必要な場面というのはまったくありませんでした。

でもその当時は、建築士たるもの、やはり最終的には1級建築士を目指すのが当然だというような生真面目な考え方が私にはありました。とはいえ、何度も試験に落ち続けていると気分も落ち込みます。私は果たして建築士としてやっていけるのだろうか、迷いが生じつつあったのも確かでした。

ちょうどそんなときだったのです。知り合いの社長さんから「2級だけでもやっていけるよ」というお話を聞いたのは。

それで夢から覚めたようになって、設計事務所に約10年間勤めた後に、独立しました。独立といっても自宅を仕事場にするフリーランスですが、結論から言えば、それからは建築の仕事って本当に楽しくて、遣り甲斐があるなと思うことの連続でした。

もちろん仕事ですから、比率的には厳しいことのほうが多いですし、学ぶことの多さも半端じゃありません。でも、それによって自分が磨かれていくことが実感できて、トータルで楽しいわけです。

だから2級建築士を取った後、1級建築士に妙にこだわることなく、早期に独立していたらもっといろいろなことができたのではないかと思ったりもします。

でも、逆にウダウダした数年間が間にあったからこそ、独立後がより楽しく、遣り甲斐があると思えるのかもしれないですね。

そんなわけで、公式サイトにも書かせていただいているように、このお仕事をできているということ自体が、現在、私には本当に「嬉しい」というのが実感なんです。

Ⅱ. 身近な人の潜在能力に気づけば人材の輪は広がる

先ほどもいいましたように、私はいわゆるフリーランスの建築士です。事務所・仕事場も自宅ですし、法人化もしていません。

建設業界などでいう《一人親方》みたいな感じが近いかもしれません（笑）。仕事の依頼をいただくたびに、必要に応じて構造設計の方とか、インテリアコーディネーターの方に声を掛けさせていただいて、そのつどチームを作るような感じです。

それでそうしたチームのなかに入れてくれたら、本当にいいのになと思いますのが、電気工事の専門家の方です。親しい方がまだできていないのが残念ですが、施主さんと打ち合わせをする段階から電気の専門家の方がいていただけたら、話が早いのかなと常々思っています。

とくに住宅建築の場合、その家の主婦が主導権を握っていらっしゃるケースが多く、水回りと電気は要になりますから。リニューアル工事の場合には尚更、その度合いが強くなります。

お仕事の依頼は、付き合いのある工務店さんや不動産屋さんなどを通じてくるケースが多いですね。公式サイトなどをみて、直接依頼をしてくださるケースもありますが、ほとんどは工務店さんや不動産屋さんからのご紹介です。電気工事の業者さんも、現状では工務店さんや不動産屋さんから紹介していただく方と仕事をさせていただいています。

戸建て住宅の場合、パッケージ商品だったり、ある



いは注文住宅だったとしても、やはり予算が最初から限られているというケースが多いです。

施主さんのイメージの実現が第一で、その理想の住宅を建てるためには予算はいくらかかってもいいというような案件はまだありません（笑）。それでも発想の部分で自由度の比較的高いお仕事は何度も手掛けさせていただいているので、予算が限られていても、そういう仕事は楽しいですね、やっぱり。

あるいはパッケージ商品に近いような、ガチガチに制約のある仕事でも、その制約のなかでチームで団結して知恵を出し合い、試行錯誤し合いながら、施主さんにも喜んでいただけるような「こだわりの」な部分を、少しでも入れられるようにみんなで頑張れたときなども、それはそれで一つの醍醐味です。

ただ住宅建築の場合、後々のメンテナンスなども考えながら、なおかつ不必要なお金を掛けずにきちんと仕上げるというのが土台にありますので、そこを外す

陽当たりよく動きやすい主婦の城は家族にだって心地いいはず（同）



ようなことはもちろんしません。

独立を果たし、まさに翼を得たように生き生きと仕事をしている牧野さんが、時には辛い状況を自らが体験したり、仲間の話として聞くことも決して少なくないという。

設計事務所に2級建築士として勤めていた時代と、独立してからの日々を比較して、いちばん違うのはどんな部分だろうと考えますと、それは仕事のあらましを常に把握しながらかかわることができるかどうか、という点にあると思います。

設計士として勤務していたときは、担当が細かく分かれていて、たとえば設計士が現場に行くこともあまりありませんでした。また予算の配分なども分からなかったり、全体像が見えないままに仕事をしているような、もどかしい感じがどうしてもありました。



打ち合わせの最中に「あんまり現場のこと知らないんでしょ」ということを前提に話をされたり……。

もちろん、全体的にはフレンドリーに接してくださる方のほうが圧倒的に多いのですが、そういう風当たりの強い方はいらっしゃいます。私自身、いわゆるセクハラだのパワハラだのはぜんぜん気にしないタイプですが（笑）、若い女の子なんかだと、風当たりを強くされたり、妙なイジラれ方をされると辛いと思うかもしれません。

逆に若い女の子だからということで、妙に気に入られ過ぎても、困る側面があります。そういう場面も実際に目の当たりにしたりしますが、私の場合にはもう「おぼさんの領域」に入っていますので（笑）、割と仲間意識で接してくださる方が多いです。

それはそれで徹すれば問題はないのですが、私は性格的にそういうことにストレスを感じ、徹しきれないタイプということなのかもしれません。だから、どちらがいいかということではなく、人間のタイプとして、私は一人親方みたいな在り方とかが合っているのかもしれません。そのつどアウトソーシングのマッチングを考えてチームを作り、施主さんを含めて、みんなで共感し合いながら一つ一つの仕事を進めていくというようなやり方です。

ただ、先ほどもいいましたように、下請けの立場でかかわるケースが多いので、辛い状況にも時には遭遇します。それほど親しくない、比較的規模の大きい不動産業者の方のなかには、私のような立場の者には、力関係の強弱をあからさまに付けたがる方がいます。あるいは、設計士が女性であるということを良しとしない方などもまだまだいますしね。現場に行ったときにも、邪魔だというようなことを態度で示されたり、

ただ年齢が若かろうが若くなかろうが、男だろうが女だろうが、みんな建築の仕事をしたくて入ってきているわけです。だからオンとオフはなるべく分けていたただきたいというか、そのあたりの面倒臭さが払拭されるようになると、建築の仕事は本当に性差なく面白いですし、遣り甲斐があります。やる気に満ちた女性の人材も、たくさん集まる業界になるのではないのでしょうか。

一般職のOLを経験した上で建築に興味を覚え、努力の末に現場仕事に従事している牧野さんからみると、「この人は実は建築の仕事に向いているのでは？」という感性を持った女性が「一見ツリーのOLと思われるような人にも意外に多いのが分かる」という。

私が一種の小さな元請のようになって仕事をいただいた場合、いまは設計を担当する自分を起点に、設計

以外の専門的な技能・技術を持った方にそのつどアウトソーシングをしていますが、建築の仕事は必ずしも高度な専門性が必要なことばかりではないですよ。

電気工事の仕事も同様だと思いますが、付帯する細かな仕事も含めると、経験がなくても「やる気」と「センス」さえあればできる仕事はけっこうあると思うんです。私が最初に興味を持ったCADも、お手伝いに近いレベルなら、経験がなくてもセンスのある女の子ならすぐに習得できるはずですよ。

それ以外にも補助作業はたくさんあります。だから私の仕事場の機能を事務所化して、たとえばセンスのありそうな一般の子育て中の主婦の方とかに、在宅でできるような仕事をよそから受けて回したり、あるいは私の仕事の補助をしてもらったり、そういう「場」にしていければいいなとも考えています。

そういう仲間の輪を広げていって、普段は基本的に在宅仕事なんだけど、いざとなったら集まれるというような、そんな緩やかな組織の会社ができたらいいかなと。

この場合の「センス」ということなんですが、これは建築に限らず、なんにでも通用するセンスだと思うんです。地味に見える仕事でも向上心をもって合理化し、自分でやりやすい方法や効果的な方法を編み出す人って、男性女性に限らず、職種の別に関係なくいらっしやいますよね。

そういうセンスを持つ人に、建築への興味を持ってもらえて、面白いと思ってもらえたら、それが建築の仕事に向いたセンスになるのではないかとということです。

そういう存在に気付くのは、たとえば何かをこちらに問いかけてくるときに、常に的確な言葉を使ってくるとか、「あっ、そういう角度からくるのか」というような意外性豊かな発想があったりするとき（笑）。そういう人は、ごく普通に話をしているけど、「お！」と何かを気づかせてくれるような、そんな部分があるんです。

会社のなかでも、部下のそういうセンスに気付いてくれる上司や経営者のいる会社って、やっぱり職場の

雰囲気がいいんじゃないですか？ 適材適所の配置もしてくれるでしょうし。

私の周辺の主婦の方たちのなかにも、いまでこそ子育て奮闘中で疲れ気味でいても（笑）、何気（なにげ）に色彩感覚がいい人とか、実は英語が堪能だったり、事務処理能力が抜群だったりとか、そういう能力や適性を持った人は少なくありません。

そういう人たちを埋もれさせるのはもったいないですよ。たとえばそういう人が私のやっている仕事の輪のなかに参加していただけたら、私自身がきつと心強い支援をもらえると思います。

私と一緒にやった仕事を通じてその人が別のことに目覚めたのなら、そちらのほうにどんどん進出していただいてもいいですし。

それはもしかしたら、自分がそういう場にいられたらいいなと、私が潜在的に昔から夢想していた「場」なのかもしれませんね。

牧野さんの率直なお話を聞いていると、我々は普段、女性人材の必要性や活用ということを考える際に、常に「外から新たな人材を導入してくる」ということにしか、目が向いていないことにも改めて気づかされる。

もちろん、外部から常に新たな人材を導入することも大切だ。しかし、身近にいて実は潜在的な能力を持つ人の隠された輝きにも、もっと目を配る必要があるのではないか。

それは女性社員に限らない。男性社員についても、その本当の能力や向き不向きということに、無頓着になってはいないだろうか。

ひいては近年問題になっている、入社後にすぐ辞めていく若手社員に対して、その適性を引き出してあげるために、本当の意味での「最善の方法」を講じることができているだろうか。

もちろん、常に最善の方法など取り切れないだろう。それ以前に何が最善なのかさえ、一概にはいえないという問題もある。だがここで最も大切なのは、結果的にどうなったかではなく、最善手を打つための努力を常にしているかどうか、であるはずなのだ。

Ⅲ. 五感に働きかける家の快適さは電気工事ですらに際立つ

私はたまたま建築設計という仕事に興味をひかれて、いろいろな課題はあるにせよ、とにかく楽しく仕事をさせていただいていますし、これをしていることが嬉しいと思えている。それはよくいわれる自己実現に近いカタチを得られているということなのかもしれませんが、そういうのとも、ちょっと違うような感じがします。

私がいま興味をより覚えるのは、チームを組んで、みんなの思いを込めた何かを完成させていくことの楽しさ全般といえますか。たとえば先ほどいいました、潜在能力を持った主婦の方たちをコーディネートして、現在なら建築の仕事を紹介するということになりませんが、ゆくゆくは建築に限らず、いろいろなことをみんなで実現していけるような、そんな「場」づくりができればいいというふうにも、最近はあるようになりました。人への興味が以前より強くなったということなんでしょうか。

そういう意味で私の建築設計に対する基本的な考え方も、技術的なこだわりとかはとくになくて、とにかくそこに暮らす人が快適に感じるような家をつくりたいということに、よりシフトするようになってきています。

「こういう技術を使ったら快適になりますよ」という押し付けではなく、お客様の求める快適を実現するための技術や工夫を、お客様との対話や交流を通じて一緒に模索していきたい。

そういう意味で私が大切にしているのは、「五感で快適さを感じていただけるような家づくり」です。

牧野さん（アトリエM）の公式サイトには、牧野さんが大切にしているコンセプトとして、限られた予算のなかで家を建てたりリフォームしたりする際にも、ちょっとした「満足度を高めるための工夫」の事例として《オンリーワン空間》《ペットと共に》《陽当たりと風》の3つのキーワードが挙げられている。

たとえば《オンリーワン空間》では、「小屋裏収納、ロフト部屋、階段下、あそこのすみっこ、ここの角……」など、子供の頃に自分が落ち着いた場のちょっとした再現について、「収納やその他の用途と兼用させて計画すると、とても満足度の高いお家になったりします」と書いている。また《陽当たりと風》では、「現在お住いの家のなか、または生まれ育ったお家のなか、なんとなく好きな場所、気になる場所はありませんでしたか?」と問い、「そこは多分、お日様が当たっていたり、あったかい感じがしたり、風通しが良かったり、何かしら『心地よい』と感じる感覚を刺激してくれるところではないかと思うのです」「人間も動物です。この感覚の物差しはとても大事で、流行りや知識でぶれることはありません」と書いている。

牧野さんのいう「五感で快適さを感じる家」の、まさにエッセンスといえるだろう。

そしてそういう空気の流れや色彩、陽当たりなどの五感に働きかけるナチュラルな要素を、補助的・人工的に引き上げてくれるのが電気の効果だと思えます。端的には照明の効果が大きくなると思いますが、電化の仕組みを上手に活用したり、あえて使わなかったりすることでも、いろいろなアクセントの付加が可能ですよね。

照明の場合は窓の作り方も連動して、いろいろな使い方が考えられます。この窓のあるなしは、住まわれている方の精神状態にも作用してくる部分なので、そのための心理学の勉強もちょっとかじる程度ですが、したりしています。

たとえば鬱の傾向のある方は窓を欲しがらない場合が多いそうですが、事前にそうした情報をいただければ、窓からの光が住んでいる方の目線に直接合わないような形で、それでも外光の確保はするとか。あるいは色調の関係で、外光よりも人工光のほうがいいのかとか、いろいろな観点から考えたりもします。

そういう造り手側の努力や工夫というのは、お客様の耳に入れる場合もあれば、あえて入れない場合もありますね。あらかじめ耳に入れておいたほうが喜んで

いただけそうなきはそうします。でもサプライズということでもないですが、「この部屋は普通の部屋なのに、なぜか気に入っているんだ」と施主さんに感じていただきたくて、黙って小ワザをきかせたりすることもあります(笑)。

そういうこともみな、事前の施主さんとの綿密な語り合い、リラックスした雰囲気のなかでの打ち合わせを通じて共感し合い、こちらが感じ取った部分を反映させているわけです。

とにかく、そういうことをするにしても、電気というのは本当に重要だと思います。躯体の重要性と同じぐらいに。

だからこそ先ほどから何度もいいますように、直接話して気持ちを通じあえるような関係の電気工事の業者さんと知り合いたいんです。それは私のこれからの課題の一つですね。

そういう業者の営業職の方でもかまいません。たとえば女性の営業職の方で、電気にも詳しいですよというような方が施主さんとの打ち合わせの際に、最初から同席してくださったとしたら、どんなにいいだろうかと思うんです。

もちろん女性じゃなくても、フレンドリーなタイプの男性の方でもいいのですが、そうやって打ち合わせにも当初から来てくださるのであれば、そのためのお金が発生してもいいと思っています。

といいますのも、たとえば施主さんとの打ち合わせのときに、キッチンのことであれば、シンクの位置や高さ、シンクと冷蔵庫の場所との関係性など、その家の主婦が動きやすい動線の検討が絶対に必要です。冷蔵庫をはじめとする家電の大きさにも微妙な使い勝手があって、両手がふさがっているときには冷蔵庫のドアは腰骨をぶつけて閉じるという人もあれば(笑)、足でやっちゃうという人もある(笑)。付随して電気のコンセントやスイッチの設置場所も微妙に好みが変わってきたりします。

そんなことを施主さんたちとみんなでキャッキゃいながら打ち合わせをしていくと、もう、なんだかそれだけで共通認識ができていきます。その仕事全体の



ノリが違ってきたりもするものです。

設計の部分でも電気の関係はやはり特別ですので、電気工事の専門業者さんとの直接の繋がりは、やっぱりなんとか付けさせていきたいですねえ。いま改めて、心から思います。

◇取材後記

演劇の舞台制作や映画を完成させる行為は「総合芸術」であるという言い方がある。それと同じような意味で、多様な職種の専門家が集って完成させる「建築」という行為は、人間が培ってきた多種多様な技術を「総合」したものとイえる。国の定めた建設業は29業種だ。端的には29種プラスアルファの総合技術の結晶なのだ。

その結晶にプラアルファの息を吹き込むのは建物を使う人々の存在。なかでも数十年ものあいだ家族が親密に寝起きし、喜怒哀楽を共に経験し、次世代が育っていく家づくりは、「終の棲家」という言葉さえあるように、建築という行為の一つの「粋」とイえる。

その「粋」を飄々とした佇まいのもと、すべての垣根を取り払うようにして施主に向かい合い、共感し合い、建築の仕事をすることの嬉しさを基調に構築していこうとする牧野さんの取り組みは、とても好感が持てる。このように嬉々として現場の仕事に取り組む女性の姿が日常化(当たり前化)したとき、電気設備業を含む建設業界は、1歩も2歩も前に進んだといえるのではないだろうか。